

【長距離走ると、10 歳老けるねん】

私が初めて SSTR にチャレンジしたのは 2025 年。それまでは自分が走ることなど想像もしなかった。というのも、私の仕事がバイクのメカニックで、バイク業界では連休を取るなんて歓迎されないからだ。毎日バイクに接していながら、北海道ツーリングや SSTR の話は自分には関わりない絵空事のように思っていた。

ところがどっこい 15 年続いた日々が転職によって大きく変化する。なんと新しい職場（といってもバイク屋）では、むしろ休みを取得しなさいと言ってもらえたのだ！当然、有給休暇を取っても嫌な顔をされない。本当に休んでいいのか戸惑いながらも考えるより先にエントリーしていた。待ってました！と言わんばかりの高揚感で、心底こういうイベントに自分も参加したかったのだと実感した。

それからは遠足前の子供のようにワクワクしていたが、出走直前に愛機の DAX125 に故障が発覚。その他にも嵐のようなトラブル続きの中、やっとの思いで迎えた本番は嵐のような悪天候。しかし不思議とワクワクは現在進行形だった。必死に SSTR を楽しむべくポイントを取得しながら、千里浜に日の入り時刻ギリギリで到着したときは達成感でいっぱいだった。同時に「来年こそは夕日を背にゴールしたんねん」と、心の中で次回のエントリーをもう決めていた。

2026 年 2 月 22 日、午前 6 時 38 分、逸る気持ちを抑えずエントリーした。今回は SSTR 参加のあと押しをくれた友人と走れることになった。二人とも DAX125 なので犬二頭で出走…という可憐らしさを感じるが乗っているのは共にいい歳のおっさんだ。準備を進めていると、まさかの昨年と同様に出走日2日前になって故障する愛犬。自分の持つ最大パフォーマンスを発揮してなんとか修理は間に合ったが、天候も下り坂の予報で不安は募るばかり。

そうして迎えた出走当日、時刻は早朝4時46分、三重県津市から最高の日の出とともに SSTR が始まった。不安をぶっちぎるような快晴で降水確率はゼロパーセント！二人でウィリーでもしようかというほどご機嫌なのは言うまでもない。千里浜までのルートは昨年とほぼ同じだが、朝の澄んだ空気を味わいながら走っていてふと思う。

「え、こんなに景色良かったんや。え、こんなに楽しい道やったんや。」

昨年初参加で大雨だったこと、必死で道の駅を目指していたことなどが1年越しで思い起こされる。断片的に覚えている道中が、鮮やかで初めて走る道の様な感覚で更新されていく――

順調にポイントを取得しながら、あまりにも気持ち良く走れるもんでお昼ご飯を後回しにどんどん走る。そろそろお腹が減ったなど、道の駅「こまつ木場湯」にライダーマトカレーを求めて走り、到着してから券売機前で貼り紙を見て絶望した。

「お食事メニューの提供は 14 時 15 分で終了いたしました。」

到着時刻は 14 時 30 分、呑気に休憩でベンチに座ってお茶を飲んでいた 1 時間前の自分しばいたろかホンマ。同じような境遇の SSTR ライダー達が右往左往して、そして最後はみんな悔し紛れにソフトクリームを頬張る。ライダーの義務(ソフトクリーム)は怠らない。

妙な一体感を感じながら、残す最後の指定能登復興応援ポイント道の駅「内灘サンセットパーク」へ向かう。ここは昨年もそうだが、ものすごい数のライダーが集まってくる。中には HONDA トウデイの猛者もいたりでたまげた。それぞれの SSTR がここに集中しているんだと思うと、ある種の奇跡を目の当たりにしているような気分になる。

どうでもいいことだが、この時点で疲労により顔が 10 歳ほど老け込むのはライダーあるあるだろうか？しらんけど。

さて、いよいよ旅の終着点へ。千里浜に入ったと同時に、「これが SSTR よな！」と思わず声が出た。まさに、自分が思い描いていた SSTR の光景だからだ。最高の日の出とともにスタートし、最高の夕日を背にゴールする、なんと贅沢な時間か。しばし海岸で写真や動画を撮って二人のおっさんが小学生のようにはしゃぐ。

じゃれ合いながら海岸をひた走っていると、手を振る人が増えてきた。ゴールは近い。昨年は暗闇の嵐の中で一際輝いて眩しかったゴールが、今回は暖かい家のような雰囲気を感じる。

そして、ついにフィニッシュゲートをくぐる！！自然と出たガッツポーズ！！

ワーワー叫んでいたような気もするが、そんな中、誰かが言ってくれたであろう言葉が響いた。

「おかえり！！」

もの凄く心にきた。

そうか、俺ここに帰ってきたんか…。

ウルウルしながら、昨年と今年を併せて本当の意味で SSTR 完走を実感した。それほどまでに、この「おかえり」がうれしかった。後のことは正直あまりはっきり覚えていない。友人も私も気が抜けていたのだと思う。しかしこれだけは覚えている…

貝汁、食べ損ねた。

後日談になるが、帰路についた 9 時間後にはもう仕事をしていた。するとゼッケンをつけたバイクが次々と入庫してくる。これから向かうであろう人や、先日帰ってきた人が来店する。自分が経験したからこそ分かった SSTR の魅力をお客さんと共有しながら、これから出走するバイクには安全に完走できるよう整備し、帰ってきたバイクにはお疲れ様と、アフターメンテナンスを行う。バイク屋にしながら絵空事だと思っていた SSTR も、こういう形で関わりがあるのかと気づいた。

迎えてもらう側から見送る側、迎える側へ。

「私の SSTR」は終わったが、実質「SSTR」はまだ終わっていない—

…などと、詩的なことを考えながら、来年も千里浜で 10 歳老けようと思う。

